

性的マイノリティの抵抗の歴史とその拡がりの可能性

——ニューヨーク，ストーンウォール・インの暴動の事例から——

河 口 和 也

(受付 2019年10月31日)

要 旨

1969年6月27日、ニューヨーク市のストーンウォール・インという性的マイノリティが集まるバーにおいて、警察の手入れに対する抵抗が始まった。それは数日間、継続した。歴史的にはそれ以前にもローカルな都市においては、小さな規模ではあるが、性的マイノリティによる当局に対する抵抗が存在したにもかかわらず、その出来事が性的マイノリティによる「初めて」の抵抗と捉えられ、また、象徴化され、現在では世界的にも祝福されるようになった。

本稿は、どのようにしてストーンウォール・インの暴動が抵抗の歴史の象徴的な存在となり、ときには神話化され、人びとの記憶にとどめられる出来事となったのかを探っていくことを目的としている。

は じ め に

1969年6月の最後の週末、アメリカのニューヨーク市のグリニッジ・ヴィレッジにあった性的マイノリティが集まるバー、ストーンウォール・イン。ここで客たちが警察へ抵抗するという事件が起きた。この事件は、「ストーンウォール・インの反乱（あるいは暴動）Stonewall Inn Uprising (or Riot)」と呼ばれている。セクシュアリティ研究やレズビアン／ゲイ・スタディーズ、あるいはクィア・スタディーズなどにおいて、その学問領域や運動の歴史が語られるときに、この「暴動」はそれ以前のホモファイル運動からレズビアン／ゲイ解放運動への転換点としてとらえられ、また、1970年代からのリベレーション（解放主義的な運動）の「起源」として語られることが多い。ある意味で、この「暴動」は、1960年代から70年代へのメルクマールであり、性的マイノリティの運動展開にとって「象徴」（的な出来事）であり、ある種の（抵抗の）「神話」としても形成されたといってもよい。

2004年にストーンウォール暴動に関する本を著している David Carter は、「ストーンウォール暴動の国家的意義について」というエッセイのなかで、ストーンウォール暴動が持つ意義を次の6つの観点で主張している。

- (1) 多数の人が参加したこと。数千人もの参加があった。
- (2) 長期間にわたったこと。6日間継続した。

- (3) 暴力的であったこと。(コンプトンズ・カフェの暴動も暴力的ではあったが、ストーンウォール暴動ほど大規模ではなかった。)
- (4) 多数の人が参加し、長期にわたり継続し、ときに暴力的であり、つねに抵抗的であったために、ストーンウォール暴動は国家における大都市のひとつの重要な地区の意味あるセクションの当局に対して異議を申し立てることになった。
- (5) 全国メディアに取り上げられたために、意識を変化させた。

(6) LGBT の市民権運動を、ゲイ解放というフレーズを構築することにより、極端に小さかった運動から、大衆が参画するような運動へと変化させた。[Carter, 2017: 1-2]

オバマ前アメリカ大統領もこれまで少なくとも 2 回にわたり、ストーンウォール暴動について公式に言及している。1 度目は、2009 年 6 月、ちょうどストーンウォール暴動 40 周年にあたる年にホワイトハウスにおける演説の中でストーンウォール暴動で抵抗した人びとの話に触れた。そして、2 度目は、2013 年の就任演説の際に、黒人人権運動の起源とされているセルマと、女性解放運動の起源とされているセネカフォールズと並んで、性的マイノリティの解放運動の出発点となる事件として、ストーンウォール暴動を取り上げたのである。[Abelove, 2015] オバマ大統領はこれら 3 つの運動を、アメリカの民主主義の進展において重要な出来事として言及したのである。このように政治の現場においても、ストーンウォール暴動の意味はとりわけ重要な歴史的出来事として認識されていたが、それは大衆文化の文脈においても同様であった。2018 年の大みそかから年明けにかけて、ポップアーティストであるマドンナは、ニューヨーク市のストーンウォール・インに現れ、サプライズ・パフォーマンスを行った。彼女は、自身の曲「ライク・ア・プレイヤー」とエルヴィス・プレスリーの曲「Can't Help Falling in Love」を歌った。そのときには、13 歳の息子をギター伴奏役として連れ立っていたとのことだ。マドンナは自身もゲイ・アイコンであり、ストーンウォール暴動の際に、その理由として語られている「神話」である「当時のゲイ・アイコンであったジュディ・ガーランドの追悼」を警察による手入力で邪魔されたことに業を煮やした性的マイノリティたちが蜂起したという出来事の再演を狙ったパフォーマンスとしても受け止められなくもない。

本稿は、上述のように、ストーンウォールの暴動の以前にも、また以後にもアメリカ国内では性的マイノリティによる権力への抵抗の取り組みが存在していたにもかかわらず、ストーンウォール・インの暴動がいかにして抵抗の歴史の象徴的な存在となり、ときには神話化され、人びとの記憶にとどめられる出来事となったのかを探っていくことを目的としている。

第1節 ストーンウォール・インの暴動とは何か

「ストーンウォール・イン」というゲイバーは、ニューヨーク市のダウントウンに近いグリニッジ・ヴィレッジにあった。クリストファー通りに面しており、ゲイバーとはいうものの、当時はレズビアンやゲイ、トランスジェンダー、ドラァグクインなどの区分が明確になっていたわけでもなく、いわゆる性的マイノリティが集まる場所であるといえる。ストーンウォール・インは1967年に開店していたが、当時のこの境界のゲイバーのほとんどがマフィアによって経営されていた。このバーはそのなかでもっとも有名な店であった。経営者は、Tony Laura。週日は1ドル、週末になると3ドルの入店料金をとっており、ドリンク料金は1ドルだったという記録がある。内部には、二つのダンスフロアがあり、客たちはそこでダンスを楽しんでもいた。ダンスは、当時、客たちにはポピュラーであったものの、そうしたダンスは他の施設では禁じられていたのだ。[Nelson, 2015] 当時は店で客に酒を提供するには酒類販売の免許を取る必要があったが、ゲイバーでは、「性的倒錯者」に酒類を提供するということからその免許が与えられなかった。したがって、経営にあっていたマフィアは、「ボトルクラブ・システム」という方法を採用していたのである。この方式は、クラブの会員が自分の酒ボトルを持ち寄って、そこに自分の名前を書き、クラブに置いておく方法であった。現代日本の方式で言うと、「ボトルキープ」のようなものと考えていいだろう。この「ボトルクラブ・システム」に加え、ストーンウォール・インが出していたアルコール類はマフィアが供給していたものであった。

1969年の春から夏にかけて、ニューヨーク市警察はストーンウォール・インに対して、しばしば手入れを行っていた。ニューヨーク市警察のSeymour Pineは、Manhattan's First Division of the Public Morals 警察に配属され、マフィアがゲイバーやクラブの経営から手を引くようにせよという命令を受けた。警察は、1969年6月24日にも、ストーンウォール・インに対して手入れを行っていたが、6月27日には、Pineは女性私服警官2人を伴って、ストーンウォール・インに現れた。その目的は、この店が酒類販売の許可をもたずに営業している証拠を押さえるためであった。深夜0時に、手入れが開始された。バーの客たちは外に連れ出された。普段なら、外に出されたあとに散らばって逃げていくのだが、その日は、店の外でたむろしていた。深夜2時になると、ストーンウォール・インの群衆は、クリストファー・ストリート中にあふれかえったとのことである。[Nelson, 2015]

Pineはマフィアに雇われていた人の数人を逮捕した。また、逮捕すべきと見なされた客数人も逮捕されたが、そうした人びとはトランスヴェスタイトと完全に女装をしていた人だった。その後、Pineはバーから酒やドラッグなどの証拠を押収した。

他方、ストリートの群衆のほうは、Pine と他の警官が従業員や客を連れ出すのを目にする
と、やじ馬がはやし立て、何人かが「We shall overcome」を歌い出したのである。クリスト
ファー・ストリートの群衆は、バーの外にいるトランスヴェスタイトのひとりを警官が襲撃
するまでは、それほど攻撃的にはなっていなかった。トランスヴェスタイトが、ハンドバッ
グで警官の頭をたたいたので、警官はいら立っていた。警官のほうも警棒でトランスヴェス
タイトを打った。群衆は、コインや石やビール瓶をバーに向かって投げ始めた。何人かが逮
捕されたあと、ストーンウォール・インのなかにいたレズビアン一人も逮捕された。彼女は
抵抗を続け、外に出た後も警官が彼女を持ち上げて、警察の車両のなかに引っ張っていった。
この光景を目にした群衆は敵対心をさらに強めていった。Pine は援軍を要請したが、何度要
請しても応じられなかった。結局、援軍の TPF が来た時は、Pine と中に残っていた部下の警
官たちは、消火し終わって、外に出ることができていた。[Nelson, 2015]

しかし、その間に、外にいた群衆は、人が友人たちを呼び始め、いっそう大きなものになっ
ていった。よって、逮捕を終了した Pine に命じられたのは、グリニッジ・ヴィレッジの通り
にいた群衆の一掃であった。Pine と TPF 対群衆の攻防戦は、数時間にわたって続けられた。
群衆のメンバーは、ダンスし、歌って、クリストファー・パークに走りこんだりして、TPF
に切り込んでいった。ストリートの大群衆を解散させるためには、残虐な方法を取ることで
有名であった TPF であったが、群衆のほうもいったんは蹴散らされた後でもしぶとく再び集
まり、抵抗をつづけたのであった。しかし、明け方 4 時には、マンハッタンの警察はとうと
うグリニッジ・ヴィレッジの統制を再び達成した。そのときには逮捕者の総数は 13 名に上っ
ていた。[Nelson, 2015]

翌日、6 月 28 日の夜、群衆は再びストーンウォールに戻ってきた。夜 10 時から深夜にかけ
て、群衆は増えていき、「ゲイ・パワー」や「同性愛に平等を！」とコールした。群衆参加者
のなかには、土曜日の夜の抗議活動に対してさまざまな感情が存在していた。Ronnie Di
Brienza は、「あまりにも多くの人々が真摯な抗議というよりもお祭り騒ぎ（カーニバル）を
求めてやってきた」とも主張している。[Nelson, 2015]

群衆はますます増えていき、クリストファー・ストリートからあふれ出るほどだった。さ
らに、シェリダン・スクエアからも出てきたために、通りは人びとで覆いつくされ、交通を
妨げたほどであった。群衆は推定で 2000 人とされ、そのために TPF には 150 人の人員がスト
リートに投下されたのであった。抗議者たちは、昨日以上に、怒りをあらわにしていた。そ
の怒りは、TPF の残虐さに向けられたものであった。[Nelson, 2015]

推定 250 人から 300 人の警官と TPF の隊員が深夜から早朝 5 時にかけて招集された。警官は
警棒を使って同性愛者たちと戦ったが、抗議者たちは屈しなかった。「クイーン」たちも旅行
者も参戦した。警官は、逮捕するのをあきらめ、容易には騒乱が収まらないその地区の群衆

を一掃することに集中した。2000人の抗議者がより闘争的になり、「クリストファー・ストリートはわれわれのものだ！」と声を挙げた。5時間にわたる攻防戦により、抗議者たちはクリストファー・ストリートを解放するのに成功した。[Nelson, 2015]

研究者の David Carter (2004, 2017) によれば、続く土曜日から木曜日までの夜は、「比較的静か」であり、「警察も最初から2日目までのあいだにいくつかの秘訣を学んだ」と言っている。数日間は、ニューヨークの同性愛者による抗議は沈静化していたが、水曜日の夜、抗議は最高潮に達したのであった。これには二つの理由があったようだ。ひとつは、ヴィレッジヴォイス誌がストーンウォールの手入れと暴動を取り上げるいくつかの記事を掲載したことであった。もうひとつは、いくつかの左翼的政治グループが、ニューヨークに来て、同性愛者やトランスジェンダーらを支援して、抗議活動を行ったことであったのだ。[Carter, 2004, 2017]

水曜の夜10時ごろに同性愛者の若者、「クイーン」、「リベレーション」の支持者たちがクリストファー・ストリートに到着した。East Village Other のなかで Ronnie Di Brienza は水曜日の夜のことを「深刻以上のもの」として伝えている。この時に集まったのは、推定1000人ほどであったが、かつての応援するという振る舞いから、より深刻で、いくぶん怒りに満ちたアサーティヴネスを秘めるようになっていた。したがって、水曜日の夜は、金曜から土曜にかけての暴動よりも、いっそう暴力的なものになっていた。[Nelson, 2015]

抗議の言葉は、暴動から数日のあいだに、アメリカ全土に広まった。報道の拡大によって、ニューヨークの多くの抗議者とゲイ・コミュニティのメンバーらは、同性愛者がこれまで抑圧に反対して行ってきたいっそうの意識化を強化するために、グリニッジ・ヴィレッジでのもうひとつの抗議を欲していた。しかし、Dick Leitsch が主宰していたマタシン協会は、もうひとつの抗議を支持しなかった。水曜日に先駆けて、マタシン・ニューヨークはストーンウォール・インの窓に「目立ったサイン」を掲げて、抗議者のあいだでの平和を奨励しようとした。「我々同性愛者は、みなさんにヴィレッジの路上における平穏で静かな振る舞いを維持していただけるようお願いします。マタシン」[Nelson, 2015]

第2節 ストーンウォール・インの暴動以前の抵抗の歴史

アメリカの性的マイノリティの歴史の中で、性的マイノリティが権力に対して抵抗した出来事は、ストーンウォール暴動だけではなかった。ストーンウォール・インの暴動以前にも、性的マイノリティは、何度か、とくに警察権力に対しては闘いを挑んでいたのである。

サンフランシスコ、ニューイヤーズ・ボールとコンプトンズ・カフェテリアの暴動（1966年1月および8月）

サンフランシスコのホモファイル諸団体は、1965年1月1日に新年のダンスパーティ開催を企画した。諸団体は、警察にその開催について告知し、その際には手入れをしないことに合意していると考えていた。しかしながら、ダンスパーティ当日に、警察は開催場所であったカリフォルニア・ホール周辺に忍び込み、そのホールに入っていく客全員の写真を撮影したのであった。また、警察は中に入らせるように要請したが、弁護士は搜索許可証の提示を求めた。3人の弁護士とチケット販売係が公務執行妨害で逮捕された。

この事件が起きた時点で、翌日すぐに記者会見がもたれた。

1966年8月、警察は、ゲイの男娼やトランスジェンダー、クィーンやストリートキッズが集まる、24時間営業のコンプトンズ・カフェテリア（Compton's Cafeteria）に対する手入れを行った。このバーは、ジーン・コンプトンがオーナーを務めており、他のゲイバーでは歓迎されていなかったようなトランスジェンダーが多く集まる場所でもあった。このバーは、サンフランシスコのダウンタウン近くの男娼やトランスジェンダーのんびとが集まり、また貧困地区としても知られていたテンダーロイン地区にあった。

この8月の手入れは、警察が自ら行ったものというよりも、トランスジェンダーの客の一部が騒ぎ始めたので、その対応のために、カフェのマネージャーが警察を呼んだことにより行われたものであった。警官がトランスジェンダー女性を逮捕しようとしたが、そのときに彼女は警官の顔に飲んでいたコーヒーをかけたのであった。そのことが引き金となり、皿や家具類が投げられるような暴動に発展した。そして、店の窓ガラスが割られたのである。騒動の規模が店外にまで拡大していくにつれて、警察も応援部隊を要請し、パトカーの窓ガラスも破壊された。強制的に護送車に収容しようとしていた警官に立ち向かって、数人の客たちが抵抗していた。

翌日になり、より多くのトランスジェンダーやハスラー、テンダーロインの街の住民たちやLGBTコミュニティのメンバーが、カフェテリアのピケに加わった。店の割られた窓ガラスは、再び割られることになってしまったが、それにより、抗議活動は終了した。1960年代の警察による記録は存在しておらず、新聞にも報道されることはなかったために、暴動のデータは知られることはなかったのだ。[Armstrong and Cragg, 2006, Boyd, 2003]

ロサンゼルス、ブラックキャットの手入れ（1967年1月）

1966年から67年にかけての新年のセレブレーションの際に、二つの隣り合ったゲイバーがロサンゼルス市警の私服警官により手入れを受けた。新年のキスのイベント後に、ブラック

キャット・バーの客たちが逮捕され、棒で打たれた。そして、その後、隣のニューフェイス・バーの客たちのほうにも向かい、女性のバー経営者、マネージャー、バーテンダーを棒で打ち付けたものの、逮捕には至らなかった。駐車場でウェ이터がひどく殴打され、脾臓を破裂させるほどであった。そして、警官を襲撃するという凶悪犯罪の廉で犯罪記録に残されたのである。同じ週のうちに、規模は小さいものの、2回におよぶさらなる手入れが行われた。

ロサンゼルスでゲイ人権活動家である Alexi Romanoff (79歳) とそのパートナーであり、歴史家でもある David Farah は、当時のことを思い出しながら、ブラックキャット・バーに対する警察の手入れとそれに対する抵抗について語っている。[Thirsty In LA, 2015]

1966年以前の2年間は、ロサンゼルスでは、ゲイバーへの手入れはなく、警察によるある種の休戦協定のようなものだったという。しかし、66年末ロナルド・レーガンがカリフォルニア州知事として選出されると、新たな警察長官が任命された。67年初めから州知事としての仕事を始めるレーガンは、自分の名声を高めようとゲイバーの手入れに着手した。当時、ロサンゼルスには、およそ80軒のゲイバーがあり、66年末時点で、シルバーレイクには12軒のゲイバーが存在していた。[Thirsty In LA, 2015]

1966年、大晦日の夜にはおよそ10人あまりの覆面捜査官がブラックキャット・バーの内部に潜入し、手入れをしようとうかがっていた。バーはそれほど混み合っておらず、ちょうど年が変わるころに、客同士がキスをし始めた。女性で女性の格好をしている人と、女装したその弟がキスをしていた。その光景は、女性同士がキスをしているように見えたという。それが手入れ開始の合図だったようだ。手入れの際には、警察であることを名乗り、客は拘束状態に置かれた。しかし、客たちは自分の身分証を提示することを拒否したのである。[Thirsty In LA, 2015]

警官の一人は、クリスマスの飾りつけを引き裂き始めた。客の中には、そのような人びとが警官であるとは知らなかったのである。そうした暴行は、ギャングによって行われているとも思っていたのである。二人の警官が病院に送られるほどの負傷をした。[Thirsty In LA, 2015]

バーのなかには、3人のバーテンダーがいた。二人はゲイで、その二人はキスしていた。二人の客は、何が起きたかもわからずに、通りに逃げ出して、近くのバーであるニューフェイス・バーに向かった。警官が、かれらを追いかけていたのだが、逃げていた客はギャングに追われていると思ったのだ。かれらは走り続け、最終的には地面に転がったのである。警官らは、ニューフェイスまでたどり着いたのであった。ニューフェイスでは、その夜、手入れなどあるはずもないと思っていた。バーのなかには、マネージャーとバーテンダーがいた。警官は、だれが経営者かを尋ねた。「経営者はリー・ロイド」と答えた。大晦日ということもあり、彼女はガウンを着ていた。警官は、その経営者が女装をしていると思ったのだっ

た。警官らは彼女につかみかかり、首の骨を折り、彼女を殴打した。彼女が本物の女性であることを知ったあとでも、警官は血だらけの彼女をニューフェイシーズの前の舗道に放置した。その後、警官は、マネージャーを攻撃し、バーテンダーは叫び始めた。そしてマネージャーを捕まえて、バーのなかに引きずり込み、小突いたり蹴り上げたりした。マネージャーの脾臓は破裂し、あごと頭蓋骨を骨折した。バーテンダーとマネージャーとその他14名が逮捕されたのであった。[Thirsty In LA, 2015]

スネイク・ピット・バーへの手入れ (1970年 3月)

ストーンウォール暴動が起きた9か月後の1970年3月8日に、ニューヨーク市警察は、スネイク・ピット・バーへの手入れを行った。この手入れは、酒類販売許可を持たずに経営していたということによるものだった。これにより、167名の客が逮捕され、一人が重傷を負ったのである。ストーンウォール暴動の教訓から、警察は経営側のスタッフのみを逮捕する予定であったのだが、客との区別をつけることができなかったのである。

この事件が起きた直後、ゲイ・アクティヴィスト・アライアンスは、電話作戦を挙行し、手入れの事実を伝える3000枚のチラシを配布した。すぐに、500名が抗議のデモを行い、「ゲイ・プライド」と「ゲイパワー」を叫んだ。そして、当時下院議員で、のちにニューヨーク市長となる Ed Koch も、警察の行動を批判したのである。かれは、このような大量の逮捕は違法であるとも主張した。こうした警察に対する批判の結果、警察長官の Howard Leary は1970年9月に辞任するに至った。[Armstrong and Crage, 2006: 739]

第3節 なぜストーンウォール・インの暴動が、画期的な出来事として記憶されるに至ったのか

先に述べたように、1969年のストーンウォール・インの暴動が起きる前に、すでに「コンプトンズ・カフェテリア」の暴動やブラックキャットへの警察による手入れに対する抵抗が行われていたにもかかわらず、そうした抵抗の出来事がアメリカの性的マイノリティのあいだで大きく取り上げられることなく、また人びとの記憶から消し去られることになったのはなぜなのだろうか。

この問題に関しては、Elizabeth A. Armstrong と Suzanna M. Crage が考察を行っている。[Armstrong and Crage, 2006] Armstrong and Crage によると、ストーンウォール・インの暴動がこれほどまでに記憶されてきた理由として、二つの（新しい）条件に伴われた初めての事例であったからと主張している。その二つの条件とは、アクティヴィストたちが、この出来事を記念すべきもの（commemorable）とみなしたこと、いわゆるコメモラビリティ（com-

memorability), そしてアクティヴィストたちが記念すべき媒介物(手段 vehicle)を創設する記憶能力をもつことになったことである。

「コメモラビリティ」

集合的記憶について研究する研究者は、集合的記憶の生産と維持には、人間の活動が必要であると考えている。人は、その出来事が記念することに価値があると考えない限りは、「記憶の作業」に取り掛かることはない。ある集団にとって記憶すべき出来事が、他の集団にとっては必ずしもそのようなものとして記憶すべきものとはなるわけではない。その出来事が、劇的で、政治的にも意味があるものであり、報道する価値があるものであるとみなされれば、記憶に値するものとなる。破壊的で、暴力的で、大規模な出来事は、報道の価値がよりあるものとして認識される傾向がある。また、ある集団の命運なかで、ある出来事が(よきにつけ悪しきにつけ)変化を引き起こす直接的な参画あるいは知覚はコメモラビリティを強化するのである。さらに既存のジャンルに合致するような出来事は、記念される傾向が高くなるものとしてみなされる。勝利することは、とくに記念されるべきものとなるが、純粋なサクセスストーリーは、「抑圧の記憶の共有」を勝利と結びつけるような「混合されたナラティブ」ほど説得力のあるものとはならない。

「記憶能力」

コメモラビリティだけが記念するものを強化するわけではない。象徴を作り上げようとする人は、社会運動のアクティヴィストによって遂行される活動と同じような活動を組織化することに関与する必要がある。そのような人たちは、その出来事を枠づけ、他の人たちが、記念することを承認し、それに財政を振り向け、参画するように説得するために資源を活用する。集合的記憶に関する社会学的研究は、さまざまな集団が記念する手段を打ち建てるために必要なスキルや資源を有していると主張している。また、社会運動団体、企業、他の非国家的活動体も、記念する行為を行うのである。こうした集団は、記念するための手段を作り上げるために必要とされるスキルと資源にしがたって変化するのである。そうしたことを「記憶能力 mnemonic capacity」と呼んでいる。他の集団行動と同じように、この「記憶能力」は政治的、組織的、文化的機会により形成される。

「反響」

もし支持者がその出来事を記念すべきものとしてみなし、適切な記憶能力を有しているならば、記念のための手段を提案することになるだろう。記念のための手段のなかには、記念することに向けた正当化が含まれることになり、そしてその出来事がいかに、どのようなと

きに、まただれによって記念されるべきかについての計画も含まれるのである。提案された記念する手段への聴衆からの反応は、その命運を形成する。この「反響 resonance」という用語は、記念すべき手段がいかに強く意図された聴衆の「反響」を呼ぶのかということを示す。もし、聴衆がその出来事のコメモラビリティに関して合意をしなければ、記念する手段は失敗する可能性が高くなる。

反響はまた提案された記念すべき形式に依拠している。聴衆に馴染みがあり適切であるとみなされた形式は、反響する傾向が高くなる。内容と記念する形式のあいだの知覚される一貫性もまた、反響に影響を及ぼす。文化的な対象の形式と内容は、双方とも意味を伝えるものなのであるが、すべての内容がすべての形式に合致するわけではないのだ。[Armstrong and Crag, 2006: 726-727]

Armstrong and Crag は、「コメモラビリティ」「記憶能力」「反響」のほかに、性的マイノリティによる抵抗の出来事を社会に伝えるメディアについても言及している。それによれば、1964年の時点では、13の冊子媒体のうち3つのみが全国規模の読者層の広がりを持っていたものの、いずれもせいぜい数千の読者に購読されていただけであった。The Ladder の読者はおよそ1000で、Mattachine Review は500、ONE Confidential は3000であった。ホモファイル運動とゲイ解放を結びつけるような冊子である Vector (サンフランシスコ)、Drum (フィラデルフィア)、Homosexual Citizen (ワシントン DC)、さらに The Advocate (ロサンゼルス) はまだ刊行されたばかりか、まだ刊行されていない状態であった。[Armstrong and Crag, 2006: 731-732]

表：媒体の種類ごとの各事例の1年以内に報じられた記事の数

	サンフランシスコ (1965-1966)		ロサンゼルス (1976-1968)	ニューヨーク (1969-1970)	
	ニューイヤーズ・ボール	コンプトンズ・カフェテリア	ブラックキャット	ストーンウォール・イン	スネイクビット
地元同性愛メディア	8	0	5	7	9
主流メディア	7	0	1	12	4
オルタナティブメディア	0	0	2	11	1
非地元系同性愛メディア	0	0	0	9	2
総計	15	0	8	39	16

[Armstrong and Crag, 2006: 732]

この表は、1970年以前に生じたサンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨークの各都市で生じた性的マイノリティの集まるバーでの抵抗を、その発生後1年以内に報道したメ

ディアを種類別にその報道件数をまとめたものである。これを見ると、ストーンウォール・インの暴動に関連する報道は、メディアの種類の中でも、報道件数においても圧倒的に数が多くなっていることがわかる。そして、1965年のサンフランシスコで起きたニューイヤーズ・ボールにおける抵抗については地元同性愛系メディアだけでなく、主流メディアでも取り上げられ、その件数は合計するすると15件にも上っている。しかし、ArmstrongとCrageは、ニューイヤーズ・ボールはメディアにおいて注目を浴びたものの、全国規模での取り上げることとはまだ不可能であったと述べている。[Armstrong and Crage, 2006: 732]

ここでのメディアでの取り上げ方でわかるように、アメリカ国内で1965年から1969年までに生じた性的マイノリティによる抵抗は、依然として都市内というローカルな範囲でのみ報道され、認識されるものであり、全国的な情報の普及やそれによる全国的な支持を形成するには至っていなかった。そこで全国規模で初めて取り上げられた性的マイノリティの抵抗の出来事が、ストーンウォール・インの暴動であったのだ。

とはいえ、報道が取り上げれば、注目を集めるかと言えば、そうともいえない。それは、「コメモラビリティ」「記憶能力」「反響」などの要因が、うまく重なることによって、該当する出来事が、将来的に歴史のなかに大きな痕跡を残すものとなるかどうかにより規定されるのである。その意味で、ストーンウォール・インの暴動が記念すべき出来事として全国的な規模で注目を得たはじめての事例であったともいえる。

ニューヨークのアクティヴィストたちは、ホモファイル運動のメディア、各組織の会員名簿、電話作戦、ビラ配布などをとおして、記念に向けた計画を推進した。こうした会員名簿がなければ、1960年代の終わりに全国規模の活動を行うことはできなかった。まさにこれは、それまでのホモファイル運動の成果によるものであった。

ロサンゼルスの Morris Kight は、ニューヨークのアクティヴィストから電話をもらい、ストーンウォールを記念するパレードを計画した。ロサンゼルスのアクティヴィストたちも、警察などによる手入れや嫌がらせに手をこまねいており、そうしたことから、ニューヨークでの暴動に至るまでに蓄積した欲求不満に対しては同じ心情を抱いていた。そして、ロサンゼルスのアクティヴィストたちは、自分たちができなかった警察に対する勝利をニューヨークでは達成したとの感想も持っていたのである。そうした過程を経て、1970年には、ロサンゼルスのアクティヴィストたちは、パレードの許可を申請したが、その際にはロサンゼルス警察の長官は、「同性愛者のグループにハリウッド・ブルバードでパレードを行う許可を与えることは、泥棒や盗人にパレードの許可を与えることと同じようなことだ」と語った。[Armstrong and Crage, 2006: 740] こうした考えに対して法的な訴えを起し、申請後に数か月の保留期間があったが、カリフォルニア州最高裁判所は、パレード許可の政令を発行し、警察はその護衛にあたるよう要請されたのである。

シカゴのアクティヴィストは、記念イベントの挙行の支持に対しては熱意をもっていた。シカゴの運動は、それまで前衛的な地位になったことはなかった。ストーンウォールを記念しようという要請は、未熟であった運動を刺激する好機になった。シカゴのアクティヴィストたちはローカルな機関誌を使ってストーンウォールを記念することの情報を一般の同性愛者の男女に向けて発信した。機関誌には、「ゲイ解放の始まりは、すでにバークレーやサンフランシスコで見られたが、クリストファー・ストリートの歴史的出来事だけが、「正式な」ゲイ解放の始まりとして見なされるようになった」と書かれていた。[Kelly, 1970: 1]

ニューヨークでは、ストーンウォール・インの暴動を記念して、プライドパレードが計画された。それは、暴動からちょうど1年後の6月28日であった。このイベントの開催は、全国的に報道されたのである。

ニューヨークのパレードは、計画の不調などにも見舞われたが、それでも期待を超えるものであった。控えめに推計しても、パレードへの参加者は、2000人から5000人に上り、パレード後の公園でのイベントには20000人が集まった。New York Mattachine Newspaper は「それは初めての協力的な営為の賜物であった。また、これまでで最大のゲイのデモイベントであった。これまでのどんなゲイのイベントよりも多くのメディアで取り上げられたのである。」と伝えた。また、このイベントは『ニューヨークタイムズ』紙の表紙を飾ったのであった。[Fosburgh, 1970]

ロサンゼルスクリストファー・ストリート・ウェストというイベントは、シカゴやニューヨークのパレードと比較すると規模は小さかったが、それでもおよそ1000人の参加者と、15000人から20000人の観衆を集めたという。裁判所による命令の結果、ロサンゼルス警察はパレード参加者を護衛しただけでなく、警官に対して残業手当を支払わなければならなかったのである。Armstrong and Crage は、同性愛者を護衛する警察という新たな像は、参加者によって掲げられた「ゲイパワー」という標語と同じくらい、当時における状況の変化を表すものであったと語る。クリストファー・ストリート・ウェストの成功は、ストーンウォールの暴動が国家的な重要性を示すものとなったという主張を証だてするものであった。[Armstrong and Crage, 2006: 741]

ストーンウォール・インの暴動を記念しようというシカゴやロサンゼルスとの反応とは異なり、サンフランシスコにおけるそれは、控えめ、あるいは消極的であったといっていよい。サンフランシスコは、それまでのホモファイル運動のお膝元であり、「暴動」という対抗形態には、反対あるいは軽蔑の態度を示していたからである。また、シカゴとロサンゼルスのパレードが成功に終わったということを知った後でも、サンフランシスコのアクティヴィストは、ストーンウォール・インの暴動を記念してパレードを行うという考え方とその暴動の重要性を否定していたのである。

とはいうものの、サンフランシスコの一部のアクティヴィストたちは、ストーンウォールを記念することを試みていた。ニューヨークから新たにサンフランシスコに移り住んだ Gary Alinder は、記念イベント開催に向けた「数万部のリーフレット」を配布したものの、集まったのはおよそ100人であった。そのイベントは、新左翼運動由来の「ビーイン」の形式で行われたが、適切な許可もなかったために、法的に保護されることはなく、結果として参加者たちは警察により解散させられることになった。また、デモも行われたが、20人から30人の「ヒッピーやドラッグクイン」が集まっただけだったという記録もみられる。[Armstrong and Crage 2006: 741] したがって、サンフランシスコでは、ストーンウォールに対する記念は、失敗であると評価されたのだった。

こうしてサンフランシスコでは、1972年になるまで、ストーンウォール・インの暴動に対する認識に関して、記念しようという態度を取ってこなかったが、国内の他都市において、ストーンウォール・インの暴動にちなんだパレードが成功を収めるようになると、それを無視できなくなってくる。1972年に、サンフランシスコでは初めてのパレードが開催されるが、それは「クリストファー・ストリート・ウェスト」と名づけられ、50000人も参加者を得た。明らかに、これはその名前からストーンウォール・インの暴動にちなんだイベントであったのだ。しかし、このような名前で開催されたのは1年だけで、1973年からは名前を「ゲイ・フリーダムデー・パレード」と変更した。

1970年にシカゴやロサンゼルスで始まったストーンウォール・インの暴動にちなんだパレードが、成功を収めたことにより、該当都市ではそれが毎年の行事として定着することになり、またアメリカ国内の他都市へも拡がっていった。1971年には、ダラス、ボストン、ミルウォーキー、サンノゼが新たにパレードを始めることになった。その翌年の1972年には、アンアーバー、アトランタ、バッファロー、デトロイト、ワシントンDCも記念イベントに加わった。[Armstrong and Crage, 2006: 742]

ニューヨークの性的マイノリティが集まるバーへの警察の手入れとそれに対する抵抗という、言ってみればローカルな数日間の出来事がストーンウォール・インの暴動であった。それ自体では、あまり意味をもたない出来事ともいえるが、それに意味を付与する（とくに出来事が生じた以後の）様々な要因が存在していた。その要因のうちの重要なものは、その出来事を集合的な記憶として残そうとすること、すなわち記念しようとする人々の意志や活動である。その出来事が劇的であり、時代の政治的な状況にとって意味があるものについて、記憶する価値があるものとみなす。こうして、ある出来事は記念したり、記憶したりするにふさわしい「出来事」として構築されていく。さらに、そうした記念すべきものとして、記憶すべきものとして構築された出来事は、その時代のメディアの普及により、大きな注目を得ることになり、効果についても無視できないものとなるのである。このような意味で、ス

ストーンウォール・インの暴動は、アメリカ国内で1970年までに生じた性的マイノリティによる権力への抵抗のなかで、顕著な重要性をまとうこととなったのだ。

第 4 節 なぜストーンウォール・インの暴動は世界的に記念されるべきものとなったのか

「ストーンウォール・イクオリティ」というゲイの権利のための団体が、イギリスで1989年に設立された。1995年には、「ストーンウォール・ジャパン」も設立され、現在まで存続している。アメリカでは、「ストーンウォール・デモクラッツ」という組織が創設され、民主党内部の国内部門として機能している。アメリカ法曹協会は、性的マイノリティへの差別に対抗して闘った弁護士や判事に対して、「ストーンウォール賞」を授与している。

アメリカではプライド月間のさなかの2016年6月24日、全国各地でプライドパレードが行われる時期に、当時のアメリカ大統領バラク・オバマは、「ストーンウォール・イン」および周辺地区を国家記念地区 (National Monument) として指定した。この指定により、当時の暴動の舞台となったクリストファー・パーク、ストーンウォール・インのバー、および周辺の道路及び街路、合わせておよそ7.7エーカーの面積にあたる地区が永久に保護されることとなった。「私は、ストーンウォール国家記念地区を新たにアメリカの国立公園に指定します。これにより、ストーンウォールはLGBTの権利を勝ち取るため闘いについて語る国内で最初の国家記念地区になります。私たちの国立公園は、国内のさまざまな物語、豊かさや多様性、私たちのあり方を決めてきたアメリカ人の精神を反映するものと私は信じています。そして、私たちはいっそう強くなっていること、またそうした多くのものから、私たちはひとつになっていくことを。」これは、ストーンウォール・インが国家記念地区に指定されたときにホワイトハウスより出されたオバマ大統領のメッセージである。歴史における記憶にとどめるべき重要な出来事として、ストーンウォール・インとその周辺地区が意味づけられ、表象されている。そして、そうした表象は、性的マイノリティをめぐるものでありながら、同時に「アメリカ人の精神」を反映するものとして解釈されている。ここでは「多様性」を象徴するものであると同時に、「ひとつ」になるためのいわゆるアメリカの「統合」の象徴として機能させようという意味も感じられるのだ。そして、ここで「ストーンウォール」は、アメリカの公式な記憶のひとつとして承認されたということでもある。

Verga, Bretton A. et al. の *Celebrating Stonewall at 50: A Culturally Geographic Approach to Introducing LGBT Themes.* という論考では、ストーンウォール・インの暴動が生じたエリアが国家記念地区になったことをきっかけに、学校における社会科の授業のなかで、この暴動がどのような理由で、いかに起きたのかを教示し、生徒に考察させるカリキュラムについて

て分析している。[Varga, Bretton A., Beck, Terence A., & Thornton, Stephen J., 2019] そこで教育的あるいは研究的枠組みとして提示されているのは、(文化)地理学である。地理学あるいは地理という科目は、人と環境の相互作用を理解するための学問であり、また、場所、地域、文化を過去の歴史と現在を結びつける思考を推進するものである。こうした地理学の特性を活かして、生徒たちに過去の資料を読解させながら、実際になぜ、当時のニューヨーク市という都市で、どのようなことが要因となり「暴動」が発生し、その結果、どのようなことが起き、またどのような社会変化が生じたかを理解させるのである。さらに、このような教育は、当時の、女性解放運動や黒人解放運動などの公民権運動から影響を受けた部分やそれらとの類似点を浮かび上がらせることにより、アメリカの「公民権運動」全般への知識や理解を深めることにも取り組んでいる。

こうした教育をつうじた知識の普及や思考の形成は、教育制度の一環として取り入れられることにより、ストーンウォール・インの暴動が人びとの記憶のなかにいっそう定着することを促すだろう。2011年にはアメリカ、カリフォルニア州で、一般的に FAIR 法といわれる法律が施行された。これは正式名称「Fair, Accurate, Inclusive and Respectful (公正, 正確, 包摂的, 尊厳に満ちた)」法の略語であり、メディアなどでは、「LGBT 歴史法」として流通している。法律の内容としては、障害をもつ人びと、そして LGBT の人びとによる政治的、経済的、社会的貢献を、カリフォルニア州内における公立学校の教科書および社会科のカリキュラムに含めることを必須とするものとなっている。

しかしながら、他方で、米国内の7つの州では、学校が LGBT について教えることを制限したり、また州によっては、標準的なカリキュラムのなかから LGBT 問題を削除することで、そうした問題に目を向けないようにしているところも存在しており、学校区によっては、教師が LGBT の歴史や直面する問題について触れることを禁じているところもある。[Varga, Bretton A., Beck, Terence A., & Thornton, Stephen J., 2019: 9]

アメリカ国内では、先に述べたように、LGBT の歴史やその記憶や成果を教育制度のなかに取り入れようとする取り組みも行われる一方で、いわゆる公的な歴史から LGBT に関する出来事を排除しようとする動きも見られるのが実情である。

性的マイノリティの歴史に関しては、社会の差別的意識や差別的状況により、当事者たちがもっている資料や史料は意図的に処分されたり、散逸することが多い。同性愛嫌悪や異性愛主義により、社会から抹消され、隠蔽されもしてきた。そのために、歴史的事実は人びとにとって不可視であったのだ。そうしたなかでも、アメリカでは GLBT 歴史協会などの組織が設立され、喪失され散逸しがちな性的マイノリティの歴史的文書の保管や維持、さらには展示などに尽力をしてきた。GLBT 歴史協会は、現在世界に2つある LGBT の歴史博物館のうちのひとつであるサンフランシスコ GLBT 歴史博物館を2011年1月に開設した。カストロ

地区のなかのビルのそれほど広くはない 1 フロアを占めているにすぎない博物館であるが、こうした施設が開設されたことには大きな意味がある。個人的な努力のみでは維持不可能であるような資料や史料を組織的に保管し、閲覧や展示等をとおして、必要とする人びとに提供する業務は、まさに歴史を構築するための礎であるといつてよい。歴史博物館はそうした機能を担っているのだ。

この博物館に収蔵されている数多くの品々と同じように、ニューヨークのストーンウォール・インは、性的マイノリティの歴史と記憶をとどめるための物質的な「場」であり、「空間」である。

結びにかえて

本稿では、1969年6月にニューヨーク市のストーンウォール・バーで起きた「暴動」が、それまでも性的マイノリティによる権力への抵抗の事例が存在していたにもかかわらず、とりわけ性的マイノリティの抵抗の象徴として成立するようになったことを見てきた。ひとつの理由としては、少なくともストーンウォール・インの暴動以前には、この事例を伝えるメディアとして、ローカルメディアが主流であり、その「抵抗」を都市の一事件としてしか報道してこなかったことが挙げられる。その意味では、ストーンウォール・インの暴動は、全国メディアによって取り上げられ、ニューヨーク市以外の、少なくともアメリカの他の大都市における運動団体や組織の知るところとなり、そうした団体や組織、さらにアクティヴィスト個人にも大きな影響を与えたのであった。さらに、その出来事の象徴化の促進は、その事後に、出来事が起きたことを「ともに記念し」「記憶にとどめ」「反響を形作る」ために、人びとがどのような取り組みをしていくかに依拠していた。ストーンウォール・インの暴動の場合、そのことが顕著に表れた取り組みのイベントは、プライド・パレードであった。このパレードの取り組みには、すぐにいくつかの都市の性的マイノリティが呼応し、自分たちの生活する都市で、ストーンウォール・インの暴動を記念するパレードを組織したのである。

したがって、ストーンウォール・インの暴動が現在（2019年）50周年を迎えるまで至ったのは、背景としてその出来事を伝達するメディアが存在していたこと、そして、ストーンウォール・インの暴動に当初から含みこまれていた政治的意図を、その当時の、あるいはのちの時代の人びとが汲み取り、記念し、記憶し、また反応するという試みが続けられてきたことの意味が大きかったといえるのではないだろうか。

引用・参考文献

- Abelove, Henry 2015 “How Stonewall Obscures the Real History of Gay Liberation.” *Chronicle of Higher Education*, Vol. 61, No. 40 (<https://www.chonicle.com/article/How-Stonewall-Obscures-the/231099> 最終アクセス 2019.2.13).
- Armstrong, Elithabeth A. 2002 *Forging Gay Identities: Organizing Sexuality in San Francisco, 1950–1994*. The University of Chicago Press.
- Armstrong, Elizabeth A. and Crage, Suzanna M. 2006 “Movements and Memory: The Making of the Stonewall Myth” *American Sociological Review*, Vol. 71 October, pp. 724–751.
- Boyd, Nan Alamilla 2003 *Wide Open Town: a history of queer San Francisco to 1965*. University of California Press.
- Bronski, Michael 2011 *A Queer History of the United States*. Beacon Press.
- Carter, David 2004 *Stonewall: The Riots That Sparked The Gay Revolution*. St. Martin’s Press.
- Carter, David 2017 “On the National Significance of the Stonewall Uprising.” *Paper presented Stonewall Monument Monument Scholars Workshop*, October. (<http://npshistory.com/publications/ston/scholars-workshop.pdf#search=%27On+the+National+Significance+of+the+Stonewall+Uprising%27> 最終アクセス 2019.2.19)
- D’Emilio, John 1983 *Sexual Politics, Sexual Communities: The Making of a Homosexual Minority in the United States, 1940–1970*. The University of Chicago Press.
- D’Emilio, John 1992 *Making Trouble: essays on gay history, politics, and the university*. Routledge.
- Duberman, Martin 1993 *Stonewall*. A Dutton Book.
- Faderman, Lillian 2017 Explaining Stonewall. *Paper presented Stonewall Monument Monument Scholars Workshop*, October. (<http://npshistory.com/publications/ston/scholars-workshop.pdf#search=%27On+the+National+Significance+of+the+Stonewall+Uprising%27> 最終アクセス 2019.10.17).
- Fosburgh, Lacey 1970 “Thousands of Homosexuals Hold a Protest Rally in Central Park.” *New York Times*, June 29.
- Kelly, William B. 1970 “Gay Pride Week Huge Success!” *Chicago Gay Liberation Newsletter*. August, p. 1.
- 北丸雄二 1999 「ストーンウォールの反乱から30年。命がけの戦いは、いまでも続く」『エスクァイア日本版』 Vol. 13, No. 6, 6月号, p. 44
- Lukus, Ian 2010 “Stonewall Uprising.” *The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture*. Vol. 3, No. 2, pp. 231–235.
- Nelson, Tiffany Renee 2015 A Movement on the Verge: The Spark of Stonewall. *Proceeding of the Sixth Annual MadRush Conference: Best Papers*, Spring.
- Poindexter, Cynthia Cannon. 1997 “Sociopolitical Antecedents to Stonewall: Analysis of the Origins of the Gay Rights Movement in the United States.” *Social Work*, Vol. 42, No. 6, pp. 607–615.
- Shepard, Benjamin 2010 *Queer Political Performance and Protest*. Routledge.
- Stein, Marc 2019 *The Stonewall Riots: a Documentary History*. New York University Press.
- The New York Public Library (ed.) 2019 *The Stonewall Reader*. Penguin Books.
- Thirsty In LA, 2015 “Alexi Romanoff and the LGBT Civil Rights Legacy of The Black Cat.” thirstyinla.com/2015/06/12/alexi-romanoff-lgbt-black-cat/ (最終アクセス 2019.9.25).
- Varga, Bretton A., Beck, Terence A., & Thornton, Stephen J., 2019 “Celebrating Stonewall at 50: A Culturally Geographic Approach to introducing LGBT Themes.” *The Social Studies*. pp. 1–10.

Summary

History of resistance from sexual minorities and the possibilities of
its diffusion: the case of Stonewall Inn Riot, New York City

Kazuya KAWAGUCHI

On the 27th of June 1969, at the Stonewall Inn in New York City, a small bar where sexual minorities came together, the customers set out the resistance to the police raid. This resistance had continued for several days. It became bigger and bigger to be called “riot” or “uprising” and this was supposed to be the beginning of lesbian and gay liberation. This event was often considered as the “first” resistance from the oppressed sexual minorities to the authorities, and symbolized to be world-wide pride celebration.

The objective of this paper is to explore why and how the Stonewall Inn Riot became the symbol or myth of the historical resistance from sexual minorities and it was remembered and maintained in the people’s memory.